

# 高大連携型環境教育の取組

—京都光華女子大学と京都府立東稜高等学校の連携を事例として—

高野拓樹  
松原久流  
谷正流

## I 環境教育

### 1. 環境教育の原点

「環境教育」という言葉が世の中に広がっていった原点は、1972年にスウェーデンのストックホルムで開催された国連人間環境会議（ストックホルム会議）とされている。ここで採択された「人間環境宣言（ストックホルム宣言）」で、はじめて環境教育が盛り込まれ、人間環境の保全と向上に関し、世界の人々を導くため共通の見解と原則が定められたのである。また、この宣言に基づいて環境問題に特化した国連機関として国連環境計画（UNEP）が設置され、ユネスコと協力して、環境教育の国際的なネットワークを構築していった。そして、1975年にユーゴスラビア（当時）のベオグラードで開催された環境教育専門家会議では、その後の環境教育の規範となるベオグラード憲章が作成された。このベオグラード憲章では、環境教育の目標を「環境とそれに関連する諸問題に気づき、関心を持つとともに、現在の問題解決と新しい問題の未然防止にむけて、個人および集団で活動するための知識、技能、態度、意欲、実行力を身につけた人々を世界中で実行育成すること」と定義し、環境教育における世界共通のフレームワークとなっている。

ところで、環境教育に大きな影響を与える重要な概念として、「持続可能な開発（sustainable development）」がある。この概念は、1980年に国際自然保護連合（IUCN）が国連環境計画（UNEP）の委託により、世界自然保護基金（WWF）の協力を得て作成した報告書「世界保全戦略」で初めて登場する。副題は「持続可能な開発のための生物資源の保全」となっており、前述の国連人間環境会議（1972年）の人間環境宣言の内容を発展させ、具体的な行動指針として展開したものである。この持続可能な開発という概念

は、1982年にケニアのナイロビで開催されたナイロビ会議、さらに、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）へと継承され、環境教育においても大きな影響を与える重要な位置づけとなっていった。そして、地球サミットで採択された行動計画「アジェンダ21」に盛り込まれた環境教育に関する行動計画は、現在の「持続可能な開発のための教育（ESD = Education for Sustainable Development）」へと発展する。また、2002年のヨハネスブルクサミットにおいて日本政府と日本のNGOとの共同で提案した「持続可能な開発のための教育の10年」は、2002年の国連総会で決議され、2005年から2014年にかけて実施されてきた<sup>[1]</sup>。

### 2. 高大連携型環境教育の現状

環境問題を解決する方法として、環境法規制の整備、環境技術開発などのアプローチが考えられるが、環境教育もまた、この問題を解決する方法として最も有効なもののひとつであろう。大量生産、大量消費、大量廃棄のライフスタイルから脱却し、持続可能な社会を構築するためには、それを運営する人間の精神的な豊かさや地球環境を思いやる感性を育むことが重要であり、環境教育はこのような人材の育成を担っている。このため、環境教育は、児童、生徒、学生などこれまで幅広い学齢で展開されてきている。また、学校単位で環境教育を完結させるのではなく、大学と高校が連携して環境教育を実施する高大連携型環境教育も全国規模で実施されている。例えば、公立鳥取環境大学では、環境をテーマにした約100科目の授業を高校への「出前授業」として提供している。その内容は、生物多様性や大気汚染、リサイクルなど多岐に渡る<sup>[2]</sup>。また、環境問題について高校生の意見を発表してもらうことを目的とした「全国高校生環境論文TUES

(Tottori University of Environmental Studies) カップ」を2004年から実施しており、優秀作文を表彰している<sup>[3]</sup>。また、文京学院大学環境教育研究センターでは、大学で環境を学ぶ学生が先生になって高校生に授業を提供している<sup>[4]</sup>。

このような高大連携型環境教育の取組は、大学の教員が高校側に出向き講義をするスタイルが一般的だが、上述のように、高校生の環境関連作品を表彰したり、大学生が高校生に授業を行ったりするユニークなケースも増えつつある。本論文では、この高大連携型環境教育に焦点を当て、京都光華女子大学（以下、本学）と京都府立東稜高等学校（以下、東稜高校）との連携したこれまでの環境教育の取組について紹介する。

## II 京都光華女子大学と京都府立東稜高等学校との高大連携型環境教育

### 1. 大学コンソーシアム京都「実践研究共同教育プログラム」

本学と東稜高校との環境教育に関する連携は、大学コンソーシアム京都が主催する「実践研究共同教育プログラム」を通じて、2011年度から2013年度までの3年間に実施された（2014年度からは独自の高大連携

事業として継続して現在に至る）。この事業は、高校教員と大学教員が共同で授業プログラムを開発し、高校の正課授業の中で継続して実践する取組であり、生徒には大学での「学び」に触れる機会、高校・大学教員には教授法の共有やそれぞれの現状を把握する機会となっている。一過性の模擬授業・出前授業とは異なり、高等学校の正課授業の中で継続的に大学教員が授業を実施することで、次の点の実現を目指している。①生徒の「学び」の魅力の新たな一面の発見、②生徒の高等学校の「教科」の枠を超えた学問の体験、③生徒が高等教育の一部に触れる貴重な体験、④「生徒」から「学生」への円滑な移行、⑤高大の教員間での教授法の共有・現状の把握。表1に2011年度から2013年度までの3年間に実施された事業内容を示す<sup>[5]</sup>。

### 2. 座学と実学からなる高大連携型環境教育

本学と東稜高校との高大連携型環境教育は、大学教員または大学生による講義と、東稜高校の校庭での緑化活動の大きく2部構成で実施されている。本学の講義を受ける前段階で、高校生は大学コンソーシアム京都の当該プログラムに参画している他大学、および、東稜高校の教員（表1参照）から、イースター島の歴史を事例として、文明崩壊の原因が、環境破壊や急激な人口増加にあったことを学んできている。そこで、

表1 京都光華女子大学と京都府立東稜高等学校との高大連携実践研究共同教育プログラム

（出典：大学コンソーシアム京都 実践研究共同教育プログラム  
<http://www.consortium.or.jp/project/kodai/joint-p> から著作作成）

年度	担当大学教員	対象	教科・科目名 テーマ	実施回数	高校責任者
2011	植村善博 佛教大学 教授	2年生 I類文理科系（文系） 26名 II類文理系（文系） 42名 合計68名	教科名：地理歴史科 科目名：世界史・地理 テーマ：文明と環境	全12回中 3講義	松原久 東稜高校 教諭
	大谷大学 准教授 高野拓樹 京都光華女子大学 短期大学部 講師				
2012	武田富美子 立命館大学 准教授	3年生68名 2年生60名 合計128名	教科名：地理歴史公民科 科目名：世界史・地理・政治経済 テーマ：文明と環境	全12回中 4講義	松原久 東稜高校 教諭
	植村善博 佛教大学 教授 高野拓樹 京都光華女子大学 短期大学部 講師 鈴木寿志 大谷大学 准教授				

2013	武田富美子 立命館大学 准教授	3年生 58名 2年生 70名 合計 128名	教科名：地理歴史公民科 科目名：世界史・地理・政治経済 テーマ：文明と環境	全10回中 4講義	松原久 東稜高校 教諭
	植村善博 佛教大学 教授				
	鈴木寿志 大谷大学 准教授				
	高野拓樹 京都光華女子大学 准教授				

本学が提供する講義では、「持続可能な社会を目指して」をテーマとして、現在の地球環境問題や、未来の地球環境について考える機会を提供する内容とした。具体的には、大学教員自身が取材をした、温暖化により沈みゆく太平洋島嶼国や砂漠化に苦しむ内モンゴル自治区などを写真とともに紹介し、本学の環境ボランティアサークルである「グリーンキーパー」の活動を紹介した。図1に本学における講義の様子を示す。



図1 本学で環境に関する講義を受ける東稜高校生

東稜高校における緑化活動では、上述のグリーンキーパーが中心となって、東稜高校生と協力して年2回(初夏と初秋)実施している。東稜高校には、幅0.5m×長さ2~10mのグリーンベルトが5ヶ所と、エントランスにプランターが6つ設置されており、これらが緑化対象となっている。これらの場所に、夏の花と冬の花をその季節ごとに植えている。図2に緑化活動の様子を示す。



図2 本学学生と東稜高校生による緑化活動の様子

### 3. 環境教育に関する包括協定の締結

既述のように、本学と東稜高校は2011年度からスタートした大学コンソーシアム京都主催「実践研究共同教育プログラム(東稜高等学校プログラム)」において3年間、環境教育に関する講義やグリーンキーパーによる緑化支援活動などを実施してきた。そして、プログラム終了後、2014年5月、本学と東稜高校は、双方の教育に係る交流を通じて、連携と協力を充実、強化することにより、一層魅力ある高等学校教育及び大学教育を実現していくことを目的とし、教育交流・連携と協力に関する連携協定を締結した。東稜高校は、2014年度よりアカデミーコース、キャリアコース、総合コースを設置しており、その中でも国公立大学・難関私立大学への進学を目指すアカデミーコースでは、高大連携による学びの特別プログラムとして「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」「サイエンス・リサーチ・シリーズ」を展開している。この特別プログラム「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」の中で、本学と東稜高校が連携・協力しながら環境教育についての講義・実習を計画し実践している<sup>[6]</sup>。図3に教育協定の調印式の様子を示す。

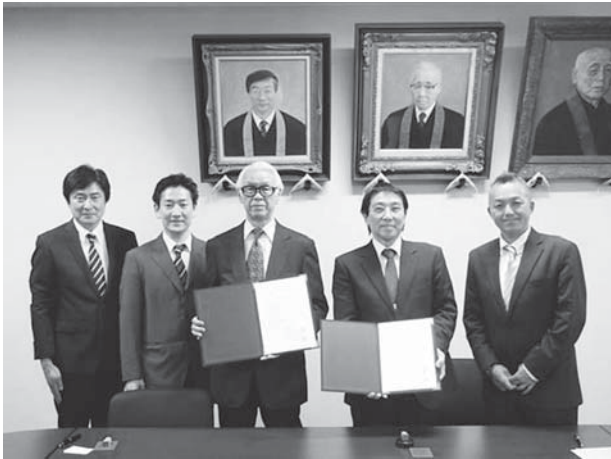


図3 本学と東稜高校との教育協定に関する調印式の様子

教育協定を締結してから現在に至るまで、これまでのコンソーシアム京都「実践研究共同教育プログラム」

をベースにオリジナルのカリキュラムを作成し実践している。表2に2015年度の「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」の実施要項を示す。

### Ⅲ 高校生による研究成果の発信

#### 1. 一方通行の学びに終わらせないために

「平成18年度高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議（文部科学省）」の報告において、高大連携の現況は「出口指導」や「授業紹介」に留まっており、大学卒業後の「大学等の向こうにある社会」を意識させたキャリア教育の視点が望まれるとされた<sup>[7]</sup>。また、平成26年度中教審答申では、「生きる力」のひとつ「確かな学力」について、社会で自立して活動していくために必要な力という観点か

表2 2015年度の「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」の実施要項

目的	大学教員と高等学校教員が授業プロジェクトを共同開発し、双方の連携を通じて相互の教育に係る交流・連携を図り、一層魅力ある教育内容を実現することを目的とする。 また、米国の学校とESDにかかる共同プロジェクトを実施し、実践内容の交流を通じて、持続可能な社会の構築に向けて、地球規模の課題解決に自ら行動を起こす力を身につける。
研究テーマ	「文明と環境」～京都光華女子大学との高大連携プロジェクト～ESD日米共同プロジェクトの実践プログラム 人間による環境破壊と気候変動が、文明の興亡に影響したことを理解し、今日始まっている「文明の暴走」をいかに食い止め、今後の地球のあり方を考察できる能力を養うとともに、“Think Globally, Act Locally”の概念に基づき、身近な環境保全を推進できる実践力を育む。また、米国の学校とのESDにかかる共同プロジェクトを実施し、実践内容の交流を図る。
内容	<p>【前期】</p> <p>第1講「文明と環境ガイダンス+失われた文明」○  第2講「持続可能な社会の実現をめざして1」☆  中間考査終了後「緑の学校コンセプト発表」+事前作業▲  第3講「緑の学校をめざして1～実習」▲□  第4講「緑の学校をめざして2～実習」▲○  ※夏季休業中は当番制で花壇のメンテナンス（東稜高校保健委員会と連携）</p> <p>【後期】</p> <p>※ESD日米共同プロジェクトにかかる実践や交流を随時実施する。  第5講「持続可能な社会の実現をめざして2」☆※京都光華女子大学で実施  第6講「緑の学校をめざして3～実習」▲□  第7講「文明と環境がめざすもの1」○  第8講「持続可能な社会の実現をめざして3」☆□  ※京都光華女子大学で高野ゼミに合流し研究交流  第9講「荒ぶる時代とおだやかな時代～人類は気候の激変期をどのように生きたか～」★  ※サイエンスリサーチシリーズと共同開催  第10A講「実践発表会にかかる事前指導」○  第10B講「実践発表会」☆○</p> <p>【担当講師等】</p> <p>○：松原 久（京都府立東稜高等学校教諭）  ☆：高野拓樹（京都光華女子大学地域連携推進センター長/環境教育推進室長）  ▲：谷 正流（京都光華女子大学地域連携推進副センター長）  □：京都光華女子大学 環境ボランティアサークル グリーンキーパー  ★：中川 毅（立命館大学総合科学技術研究機構教授古気候学研究センター長）  その他：ESD日米共同プロジェクト連携校担当者</p>

ら捉え、高等学校と大学のそれぞれの役割が明記されている。高等学校教育の役割は次の3項目である。

- (i) これからの時代に社会で生きていくために必要な、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」を養うこと
- (ii) その基盤となる「知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」を育むこと
- (iii) さらにその基礎となる「知識・技能」を習得させること

そして大学教育では、それを更に発展・向上させるとともに、これらを総合した学力を鍛錬することが明記されている<sup>[8]</sup>。これらの報告・答申を踏まえ、東稜高校の「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」では、一方通行の学びではなく、大学生、大学教員、高校生、高校教員らが協働して学び合い、座学・実学等を通じた課題の発見と解決への探求を行うとともに、成果を表現する「発表」を重視した取組を行っている。また、同シリーズの授業を次の①～③のプロジェクトで構成し、学習の充実を図った。

- ① 京都光華女子大学との高大連携プロジェクト：「持続可能な社会をめざして」（座学）
- ② 京都光華女子大学との環境教育プロジェクト：「緑の学校をめざして（校内緑化活動）」（実学）

- ③ 日米ESD共同プロジェクト：「School Garden Project～ Microagriculture in school, ちっちゃな学校農園」（海外連携）

2. 「発表」にこだわった研究成果の発信

「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」での学びの中で、高校生は様々なテーマで展開される授業の中から最も興味・関心を持った内容を発表テーマとして選択した。そして同じテーマを選択した者同士でチームを結成し、コンテスト形式の「実践発表会」で学びの成果を発表した。発表ではパワーポイントと発表原稿を淡々と読む形式を禁止し、紙ベースの図表類・写真類（6枚以内3行以上の文字の羅列禁止）をOHCで投影、伝えたい内容は口頭で表現させた（なお、理想の発表スタイルは故スティーブ・ジョブズ氏が初代iPhoneを紹介した、シンプルかつ明確な伝説のプレゼンテーションを目指した。生徒らはYouTube等の動画を何回も視聴し、スクリーンに投影される内容、発表内容の構成、話し方の強弱・スピード等を細かに分析し、自らの発表に反映した）。審査は発表生徒を含む来場者全員が審査表の各審査項目を5段階評価し、その合計で順位をつけ表彰した（表3）。なお、2015年度は実践発表会に先立ち、代表生徒らによるプロジェクト全体に係る校外発表を2回実施し、多くの指摘・助言等を得ることができた（表4・図4）。

表3 2015年度における「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」の実践発表テーマ一覧

発表テーマ
温暖化が我々の生活に与える影響
京都のシカ問題 ～京しかミーツ～
スクールガーデンの効果 ～美しい玄関をお花で彩り～
ブルーベリーから電気をつくる ～私たちの生活を変える～
持続可能なエネルギー開発について ～ブルーベリーの活用～
スクールガーデンを通じた植物リサイクルの可能性 ～持続可能な活動をめざして～
世界とつながるスクールガーデンをめざして ～ESD+ARTの取り組み～
スクールガーデン活動を通じた行動観察 ～ファインダーから見えてきたもの～

表4 2015年度における「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」の校内外の発表一覧

発表時期	発表を行ったイベントと発表方法	会場
2015年12月	「第14回日本語による外国人のメッセージコンテスト」（パワーポイントを使用した代表生徒らによる口頭発表）	京都府精華町役場
2015年12月	「ワンワールドフェスティバル for Youth 高校生のための国際交流・国際協力EXPO 2015」（大型ポスターを使用した代表生徒らによるポスター発表）	大阪国際交流センター
2016年2月	「実践発表会」（公開授業形式・チームごとの全員発表）	東稜高校視聴覚教室



図4 校外における発表の様子（左：精華町 右：大阪国際交流センター）

### 3. 発表を行った高校生の感想

様々な場面で発表を行った高校生の感想を以下紹介する。

- 同じ活動をしておられる方のお話も聞けて、その方が「こういう活動をいくらしていても、やっている本人達の意識が変わらなければ何も変わらない」と言われました。私たちの活動は、全員が意識を持って行っている訳ではありません。今後は全員が意識を持って行う事が必要だと思いました。また、他の方からも、「もっと深くまで調べなさい」とも言われました。私達が現在やっている事は、緑化活動の入口の部分でしかありません。これからの活動で、もっと深くまで学び、もっとたくさんの方々と繋がっていけるようにしたいです。（大阪国際交流センターにおけるポスター発表より）
- 今回のプロジェクトと発表の取り組みを通じて地球は今、とても危機的状態であることが分かりました。でも、ちょっとした意識改革や身近なコツコツとした活動が地球を救う一歩になることも学びました。これからは「持続可能な社会」をつくるために、多くの人にプロジェクトで学んだことを伝え、一緒に活動ができるようにしていきたいです。（実践発表会後のまとめより）

## IV 海外との連携

### 1. ESDの取組を通じた日米交流

「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」の活動を、広

く世界と交流できないかという発想が生まれたのは2014年の末であった。筆者（松原）が参加応募した「2015年度ESD日米教員交流プログラム（環境教育）」が採択され、スクールガーデン（校内緑地・花壇等）での活動を通じた日米間の交流ネットワークが構築された（このプログラムは、フルブライトジャパン（日米教育委員会）・アジアユネスコ文化センター（ACCU）によって実施され、日本国内の小中高等学校から選抜された環境教育分野6名、食育分野6名、そして米国内の学校から選抜された15名の教員が参加してESDに関する共同プロジェクトを企画し、実践・交流を行った。スクールガーデンのプロジェクトに参加した連携校は次のとおりである。鳥取県立鳥取西高等学校、札幌市立月寒小学校、京都府立東稜高等学校、Brookline High School（ボストン）、Stephen Gaynor School（ニューヨーク）、Saint Stephen's & Saint Agnes School（アレクサンドリア）。

東稜高校では先述した5ヶ所のグリーンベルト、エントランスのプランター、野球部ブルペン横の「栄光の桜」エリアを「スクールガーデン」とし、「記録」チームと連携を取りながら、取組の様子をFacebookで紹介しあい交流を深め、さらに、連携校間での作品交流も推進した（図5～7）<sup>[9]</sup>。

スクールガーデンという同じ活動をする日米の児童生徒たちが、それぞれの国や地域の特性を生かした取組を紹介しあい、そこから得られたものをかけ橋として交流するこのプロジェクトは、単に草花を植えるという活動から、世界の仲間と「つながる」活動へと展開できる取組であった。



図5 札幌市立月寒小学校の児童が描いた絵をスクールガーデンに展示



図6 国内連携校と関係機関へのプレゼントとして廃棄されるアサガオのついでクリスマスリースを製作  
(米国連携校への送付は植物検疫の関係で断念)



図7 剪定の際に出る花びらを急速乾燥・樹脂化させ押花のブックマークを製作  
(クリスマスカードを添えて米国連携校へプレゼント)

2. 「ESDの視点に立った学習指導で重視する学習態度」の評価から見えた課題  
「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」やESDの取

組を通じて、高校生が学び始めた1学期の段階を「0」として、3学期の校内実践発表会までの間、自分がどれだけ成長・後退したかを5段階で自己評価させた(表

5)。「コミュニケーション力 (2.33 点)」、「他者と協力する態度 (2.78 点)」、「つながりを重視する態度 (2.50 点)」は評価項目の中では高い点数であり、生徒の成長が確認できた。一方、思考力につながる「批判的に考える力 (1.15 点)」、「未来を予想して計画を立てる力 (1.08 点)」は比較的低い点数であった。この結果から生徒の思考力を伸ばさせる学習活動を、今後取り入れていく必要性が明らかになった。

ところで、今回の取組の中では ESD の学習分野である「防災」「世界遺産」の学習が不足しているのも課題のひとつである。東稜高校は地域の防災拠点となっており、近隣には世界文化遺産醍醐寺がある。学習環境としての立地条件は十分に整っているため、プロジェクト内容を再考することで、さらなる多面的な展開が期待できる。一方、地域社会との連携や米国連携校との直接的交流が不十分であるため、「地域から学ぶ」「世界から学ぶ」ことを意識した取組の推進が、今後の「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」の方向性に大きく影響すると思われる。

## V エネルギー教育の重要性

東日本大震災に起因する福島第一原発事故は、我が国のエネルギーのあり方について、厳しく反省を求める結果となった。この事故が起こる以前、原子力発電は我が国にとって CO<sub>2</sub> 排出削減の切り札ともいえるべき存在であったが、一方で大事故につながるものであることが身を持って証明されたのである。我々人類のエネルギーはどの方向に向かうべきなのか。

ところで、今の大学では、「“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」(2012 年「学士課程答

申)の習得が求められている。本学と東稜高校との「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」においても、大学で求められる学びを高校生に伝えるために、論争的課題の導入を通じて、高校生にあるであろう紋切り型の考え方に「ゆさぶりをかける」ことをめざして、「原発再稼働に賛成ですか、反対ですか?」「30年後のエネルギーは何がメインで使われていると思いますか?」という、2つの論争的課題を講義で導入した。具体的には、原子力、火力、風力、太陽光、地熱、水力などの各種エネルギーについて、メリットとデメリットを詳細に解説し、上記の2つの論争的課題を授業の前後で質問した。

図4に示すように、(a)授業前の原発再稼働に賛成の割合が55%、反対の割合が45%であるのに対し、(b)授業後では、賛成が78%、反対が22%となり、賛成の割合が23%増加した。また、それに応じて、図5(a)授業前の原子力の割合が27%であったのに対し、(b)授業後では70%となり、43%の増加が確認された。一方、同図(a)授業前に64%の最大の割合を占めていた太陽光は、(b)授業後には9%となり55%の減少となった。授業では、エネルギー源の安全性、安定性、コスト、環境問題の4つの側面からメリットとデメリットを解説したが、原子力の安全性に不安を抱きながらも、高効率発電でコストが安いことと、CO<sub>2</sub>排出量が極めて少ないという地球温暖化抑制という環境問題に関するメリットの方が大きく感じた可能性がある。なお、コストについては、原発のバックエンドコスト(原発を動かした後に発生する、使用済み燃料の再処理や MOX 燃料加工、さらに工場の解体や廃棄物処分に係る費用)に関する内容を十分に説明した上での考えの変化である。

表5 「ESDの視点に立った学習指導で重視する学習態度」の評価

対象：「ヒューマン・リサーチ・シリーズ」受講生徒41人、2015年5月の段階を「0」として、5段階で2016年2月にはどれだけ成長・後退したかを生徒自身で評価

持続可能な社会づくりの構成概念		ESDの視点に立った学習指導で重視する学習態度	平均	最高	最低	差	伸ばしたい能力・態度
人を取り巻く環境に関する概念	多様性	批判的に考える力	1.15	4	-2	6	思考力
	相互性	未来を予測して計画を立てる力	1.08	5	-4	9	
	有限性	多面的、総合的に考える力	1.55	5	-3	8	
		⇒ コミュニケーション力	2.33	5	-2	7	コミュニケーション力
人の意見・行動に関する概念	公平性	他者と協力する態度	2.78	5	0	5	ESDの態度
	連続性	つながりを尊重する態度	2.50	5	0	5	
	責任性	進んで参加する態度	2.05	5	-3	8	



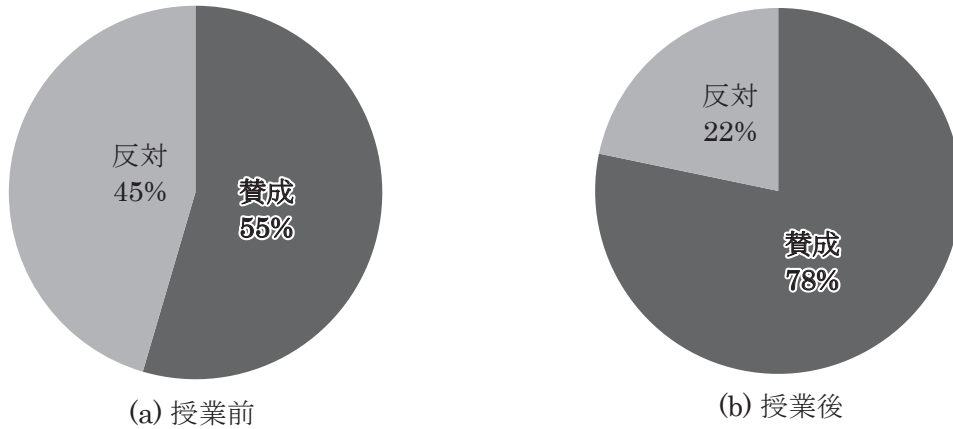


図4 「原発再稼働に賛成ですか、反対ですか？」という質問に対する回答の変化  
東稜高校2年生23名に対するアンケート（2016年5月16日実施）

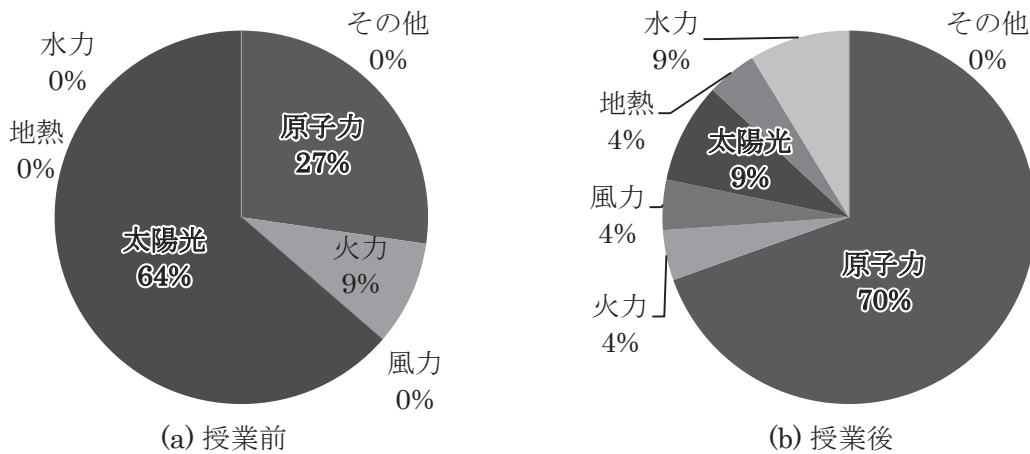


図5 「30年後のエネルギーは何がメインで使われていると思いますか？」という質問に対する回答の変化  
東稜高校2年生23名に対するアンケート（2016年5月16日実施）

ここで重要なのは、授業を受けて意見が変わったことではなく、論争的課題に対して、「本当にこの選択が正しいのか？」ということ問い続けることである。2016年度から選挙権が18歳に引き下げられた。高校生から大学生になるこの時期において、多くの正しい知識や様々な意見から、自らの意見を創造できるように、エネルギー問題の側面から主権者教育を導入していくことも、現在の高大連携型環境教育にとって極めて重要なことである。

## VI 京都光華女子大学と京都府立東稜高等学校との今後の連携体制について

東稜高校の3つのコース（アカデミーコース・キャリアコース・総合コース）の中で、キャリアコースは、2017年度から新しく「ライフマネジメント」という

分野を導入することになっている。このライフマネジメントでは、「公共」「環境」「防災」の3つをテーマとして、「あらゆる状況の下で、情報を精査、分析し適切な判断のもとにリーダー性を発揮できる人材（将来、地域で防災や環境についてリーダーシップを取ることができる人材）」の育成を掲げている。また、18歳選挙権の実施に向けての主権者教育も展開していくことになっている。これまで3つのテーマ中の「環境」について、強固な高大連携体制のもと環境教育を展開してきたが、もう一つのテーマである「公共」の中で学ぶ、主権者教育やリーダーシップ教育は、本学キャリア形成学科における学びの基軸のひとつでもある。このような背景から、「環境」というひとつの切り口からの連携だけではなく、「公共」も含めた複数の分野からの高大連携の新しいかたちをめざして、現在、本学キャリア形成学科と東稜高校キャリアコースとの

間で具体的なカリキュラムの検討段階に入っている。

### 参考文献

- [1] 環境教育, 日本環境教育学会編, 教育出版, 2012, p.1  
～4.
- [2] 公立鳥取環境大学 平成 28 年度「出前授業」一覧,  
[http://www.kankyo-u.ac.jp/about/environment/  
delivery/list/](http://www.kankyo-u.ac.jp/about/environment/delivery/list/)
- [3] 公立鳥取環境大学 全国高校生環境論文, [http://  
www.kankyo-u.ac.jp/about/environment/tuescup/](http://www.kankyo-u.ac.jp/about/environment/tuescup/)
- [4] 文京学院大学環境教育研究センター, [http://www.  
u-bunkyo.ac.jp/center/environment-education/  
2012/01/post-47.html](http://www.u-bunkyo.ac.jp/center/environment-education/2012/01/post-47.html)
- [5] 大学コンソーシアム京都 実践研究共同教育プロ  
グラム, [http://www.consortium.or.jp/project/  
kodai/joint-p](http://www.consortium.or.jp/project/kodai/joint-p)
- [6] 地球環境クライシス－未来へつなぐ命のバトン－,  
高野拓樹, ムイスリ出版, 2016, p.177-178.
- [7] 高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調  
査研究協力者会議報告書～普通科におけるキャ  
リア教育の推進～平成 18 年 11 月, 平成 18 年度高等  
学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研  
究協力者会議 (文部科学省), 2006, p.4～5.
- [8] 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた  
高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体  
的改革について～すべての若者が夢や目標を芽  
吹かせ、未来に花開かせるために～ (答申), 平  
成 26 年 12 月 22 日, 中央教育審議会, 2014, p.9.
- [9] スクールガーデンと世界をつなぐ ESD の実践～  
ヒューマン・リサーチ・シリーズ「文明と環境」  
の取り組み～, 松原久, 京都の国際教育 39 号,  
2016, p.8～14.